

沖縄地方産食用海鼠の種類及び學名

大島, 廣
九州帝國大學農學部動物學教室

<https://doi.org/10.15017/20875>

出版情報：九州帝國大學農學部學藝雜誌. 6 (2), pp.139-155, 1935-02. 九州帝國大學農學部
バージョン：
権利関係：



沖縄地方産食用海鼠の種類及び學名⁽¹⁾

大 島 廣

(昭和十年一月八日受理)

緒 言 及 び 總 論

海鼠の内臓を去り煮て乾燥し食用の製品をなしたものを我國では延喜式以來“熬海鼠”と書いてイリコ（伊里古）と訓ませてあるが、なほ“焦鼠”“煎海鼠”など書く場合もある。支那で“^{ハイサン}海參”と呼ぶのは蓋し強精劑としてその效驗が人參に匹敵すると云ふ所に由來したものらしい。南洋諸地方から盛にこれを支那に輸出し、馬來語でこれを“tripang”又は“gamat” (gamah, gamet) と云ひ、スマトラの南岸及び西岸では“seewaloe”，南部モルッカの或地方では“eb”と呼ぶ由である(3, p. 30)。また南洋諸地方の市場に広く通用する“bêche-de-mer”と云ふ名は西班牙語 bicho do mar 即ちウミナメクヂからの轉訛であると云ふ。

北は樺太・北海道から日本海・太平洋兩岸に沿うて南鹿兒島に及び、また朝鮮の東西兩岸に亘つて廣く分布する *Stichopus japonicus* SELENKA は我國に於ける最も普通の殆ど唯一と云つてよい程の食用種で、これにアカコ・クロコ・トラコ・タハラコ等の異名はあつても悉く同一種である。その製品である熬海鼠には有刺・無刺の區別をするが、これとても同一種の間で疣足が著しく突出して残るか、收縮して不明瞭となつてゐるかの差異に過ぎない。更に製造法の相違からは串海參・^{クシコ}熨斗海參等の別が生ずる。

この他には北陸地方でムカデイリコと呼ばれる *Stichopus nigripunctatus* AUGUSTIN (= *S. owstoni* MITSUKURI) 及び宮城縣下の有名なキンコ（光參）*Cucumaria japonica* SEMPER の2種があるけれど、共に小局部の産に限られて食用種としては甚だしく重要ではない。

薩南諸島から沖縄地方へかけた、所謂琉球弧の島々には上記の3種は棲息しない代りに多数の食用種があつて盛に漁獲され、製品として輸出される。往時の記録では“從來年々三四萬斤を製して清國に輸出し、尙明治七年に至りても一八七六〇斤を輸出せり”(8, p. 9) とあるが、

¹⁾ 九州帝國大學動物學教室業績, 第67號・日本農學會臨時大會(鹿兒島)にて口演(1934.11.24).

近年の統計によれば沖縄縣の海鼠漁業は下の如き數字（單位圓）を示してゐる（10）。

年次 品目	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929
漁獲物	1,389	337	1,336	1,027	810	476	660	3,133	3,187
製造物	3,262	1,143	1,260	827	901	771	344	2,569	3,001

また八重山郡のみに就いて見るに、昭和5年（1930）に於ける漁獲物は次の如くである（11）。

町村 項目	石垣町	大濱村	竹富村	與那國村	合計
數量（貫）	22,600	32	800	3	23,435
價格（圓）	2,260	3	56	2	2,321

これらは鯨節なごは勿論比較にならぬ少額で、鰯や鰺鱈なごの産額に比べてさへ僅々十分一乃至數十分に過ぎない。

琉球産海參の品種について水産局の調査した所（8, pp. 9-10）に據るに“チリメン・シビー・ゾウリゲタ・クラウソウ・シロウソウ・カズマル・ハネデイリコ・シナフヤシ・メーハヤー・ナンフウ等なり且つ其品位上好其價甚高し其中カズマルを稱するものは清國にて開片梅花參を稱する上好のものなり又チリメンは百斤の清貨百四十兩^{テール}、其他も上品五十兩、中品四十三兩、下品三十五兩の高價なりし”とあり、この書には圖版にチリメンイリコ・シビー・ゾウリゲタ・黒ウサー・白ウサフ・カズマル・羽地イリコ・シナフヤ・メーハヤー・ナンフ等の琉球産然海鼠の圖を示してある（本文中の稱呼を綴字を異にするものがあるがわざと原の通りに記して置く）。

同じ水産局の別な書（9, p. 53）に“烏^{ウスウ}鰯即ち肉刺なく鰯あり色黒きものを貴ぶべし我琉球のチリメンイリコ之に當る”とあり、更に次の如く述べてある“清人の説に日本の海參は南洋印度より輸入するものに比すれば身薄くして味澹く印度海參は身厚くして味濃なり價過高と雖も毎斤日本海參二三斤に抵たるに足る其性質同じからざればなりと是れ本邦從來海參を輸出するもの年々に盛なれどもその品種たる概ね有刺海參に止まり無刺海參に至ては殆ど未だ出でざるに因れり、その彼に於て價貴く且つ需要多しとす無刺海參の種類は亦た決して産せざるに非らず夫の梅花參及び烏鰯の如きは既に琉球島に産するあり故に之に類するもの尙ほ該島に多からんとすその他薩隅の諸島小笠原諸島の如き亦この産なしとせず將來詳

索して以て盛に製出せざるべからず蓋し琉球人を除くの外從來之を製出せざるは無刺海參は清人の嗜好に適せずと想像せしに因るべし 夫れ有刺海參輸出の利は現に我經濟上に補あること尠からず、若し無刺海參を併せて輸出するに至らば其補益愈々大ならんす”(pp. 57—58)。圖版には烏元參・靴參・烏條參・赤參・岩參・開片梅花參・白海參等を描いてあり、白海參については“多く暖海に産し現に毎年清國へ輸入せるは暹羅呂宋及び南方諸邦の國産に係れり我琉球島に産するガスマル・シロウサメの如きも白海參にして尙ほ小笠原島の如きにも此産なしとせず”(p. 64)とある。

なほまた南洋諸地方に於ける海鼠の漁獲・海參の製造輸出等について記述されたもの(シモントス, 1881)を見るにニウカレドニアでは鳶色海鼠・眞黒海鼠・淺黒海鼠・赤海鼠・白海鼠の5種を區別すべく、同地方の商品中主眼ノ一ニシテ毎年輸出ノ高殆ト四千圓許ニ至レリ”とある。そして上記の鳶色のものは“支那ニテ一噸ノ價九十圓乃至百圓ニ騰貴セリ”と云ふ。またスールー及びマニラでは海鼠に次の10種を區別することが出来ることと云ふ、曰く“第一「ハンコリユガン」長サ一尺二寸ヨリ五寸許アリテ其形圓ク背部鳶色腹部稍白色ヲ帶テ左右乳房ノ如キモノアリ其體ハ固クシテ僅ニ進退スト雖モ伸縮自在ナリト云總テ此種類ノモノハ海ノ深サ二尋ヨリ十尋許ノ赤色ヲ帶タル礁及び砂ニ附着ス故ニ之ヲ見分テ捕獲スル甚難シ。第二「キースキーサン」長サ六寸ヨリ一尺二寸許ノモノアリ背部眞黒ニシテ甚滑ニ腹部黒灰色ニテ左右乳房ノ如キモノアリ其形圓體ナレドモ縮タル時ハ恰モ龜ノ如シ此種類ハ赤色ヲ帶タル礁及び沙海ノ淺所ニ多シ其價ハ第一種類ノ「ハンコリユガン」ト同シ最モ夥多ニシテ容易ニ捕獲シ得ヘシ。第三「テレバン」長サ八九寸ヨリ二尺許ノモノアリ種類中最モ異形ナリ礁海深サ二三尋位ノ所ニ最多シト云其色ハ第一第二種ノモノヨリモ稍赭色ニテ背部大ナル赤刺アリ其體ハ第二種類ノモノヨリモ軟弱ナルガ故ニ截割スルニ甚難シト云。第四「ミュナング」小ニシテ長サ八寸ノ上ニ出ルモノ尠シ其色ハ眞黒ニシテ形圓ク乳房ノ如キモノナク甚滑ナリ淺海ニ多シ又海岸ノ艸多キ所ニモ生ゼリ(中略)。第五「サハートウスシナ」ハ赤鳶色ニシテ全體ニ黻アリ其大サハ「ミュナング」ト殆ト同クシテ多ク岩礁ノ間ニ發見セリ。第六「ローローワン」ハ黑色ニシテ黻アリ大小種々アレモ概ネ細長形ニシテ礁海ニ多シ。第七「パラチーブランコ」ハ長サ八九寸許圓形白色ニシテ少ク橙色ヲ帶タリ日中ハ礁間及び沙中ニ蟄伏スルカ故ニ月夜捕獲スルヲ便トス。第八「マタン」ハ其形「パラチーブランコ」ニ類スレモ黒鳶色ニシテ白キ小斑點アルヲ以テ異類トセリ。第九「ハンセナン」ハ長サ一尺許綠色ヲ帶テ黻アリ多ク淡水海ニ入ル處ニ住セリ。第十「サハアトスクラ

ント」長サ一尺二寸ヨリ五寸迄ノモノアリ 白蔴色ヲ帶テ 黴アリ 甚下等ノ種類トス” (7, pp. 146—148)。

また同書の別な箇所に大英博物館所蔵の標本とその價格を示した表があるが“ソノ名稱ハ譯シ難キモノモアリ 故ニ姑ク原語ノ儘ヲ記ス” (p. 152) と斷はつて 12 種を擧げてある。そのうちわづかに原名を推測し得るものは「グレットホワイトストーン」 (= great white stone), 「グレットブラクストーン」 (= great black stone), 「スクヘヤスヒニー」 (= square spiny) の 3 つに過ぎない。

以上の記載では各々につき動物學上の同定をなすこと甚だ困難であるが、たゞ纔かに第三「テレバン」が熬海鼠一般に對する馬來語で、この場合特に tripang nanas 即ち *Thelenota ananas* (後段参照) を指すものであること殆ど疑がない。KONINGSBERGER (1904, 3) が蘭領印度地方に於ける海鼠の種類を方言を調べたものに楯手類 (*Aspidochirotae*) 14 種を列擧して居るが、それらに就いて多數各地の方言を示してあるのを上記の 10 種に較べて見るに、かの「ハンコリュガン」を云ふのが恐らく Paleleh の方言バンガルンガン (bangaloengan) に當るのではあるまいかと思はせる外には、一つも似通つた名稱を發見し得ない。多分それらは和蘭語及び馬來語、またはそれらの轉訛した言葉であらうと思ふ。

箕作佳吉博士 (1912, 4) は明治 34 年の春、親しく奄美大島及び沖縄本島の諸地方に旅行を試み、特に海鼠類を採集調査されたが、同地方産の食用海鼠十數種のうち 7 種の方言を示し且つその或物の當時に於ける價格をも記して居られる。大島 (1913, 5) は箕作博士の遺された手記や原稿を参照して食用海鼠の種類について記したところがあるが、その中に琉球地方産のもの 12 種を算へた。

筆者は昨年及び今年 (昭和 8, 9 年) 八重山地方の旅行に際し、海鼠類の同地方方言を聴き集めたが、更に古賀商店八重山支店の照屋清榮氏から 9 通りの製品熬海鼠を贈られ、その一々の價格及び市場に於ける名稱をも教へて貰ふことが出来た。いま夫等を検査した結果をさきに箕作博士の記されたものを綜合して、各種に就き簡単に記載しようと思ふ。動物學上の分類及び學名については幸ひ *Stichopus* 屬に關して CLARK (1922, 2) の、*Holothuria* 屬に關して PANNING (1929, '34, 6) の整理されたものがある故これらに従ふことにした。尙製品の名稱は必ずしも八重山乃至沖縄本島地方に限られた方言ではなく、市場に於いて一般に通川する専門的な名らしく、價格は箕作博士によるものと筆者が照屋氏から學んだものとの間に可なり

市場に於ける價格、後者は八重山に於けるものと云ふ地方的差異が加はつてゐる故であり、更に恐らくは上に掲げた表で見られる如く年によつて豊凶があり従つて市價に高低が生ずるためでもあらうかと思ふ。

各 論

屬 *Holothuria* LINNÉ, PEARSON emend.

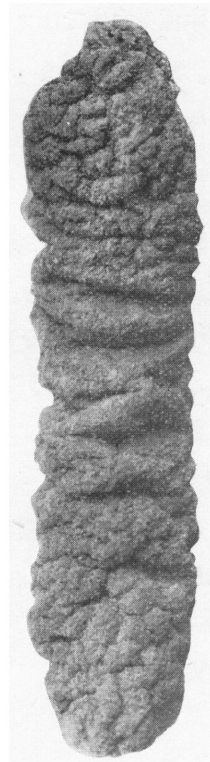
亞屬 *Holothuria* PANNING

1. *Holothuria (Holothuria) atra* JAEGER

(第 1 圖)

老成すれば體長 45-60 cm に達し全身紫色を帯びた眞黒色を呈し、若く 20-30 cm の體長のものでは濃褐色であるが、その黒い地に屢々細かい白點が散在して見られることがある。通常の場合體の表面に砂を着けて居り、その砂が所々剥げて黒色の地を顯して居るのを見る。骨片には小形環狀の基部を有する櫓狀體が多く見られ、外に小さい穿孔板乃至 X 狀體が分岐して花紋狀を呈するもの (rosettes) がある。本種は分布極めて廣く、西はザンヂバル・紅海から東ハワイ迄、南はクキンスランド・クック諸島、北はわが奄美大島に及ぶ。箕作博士は大島の名瀬・蘇我^{そがり}、沖縄^{じしやかせ}自謝加瀬等からの標本を検して居られる。

上述の如き廣い地域に亘つて暖海に極めて普通に見られる海鼠である。箕作博士によれば大島では本種をクロミシキリと呼ぶ由であるが、その製品を見なかつたこと云はれる。シキリは海鼠の意で八重山では轉じてスクル (skrū) と發音する。CLARK (1, p.174) のトルレス海峡地方での調査によれば、本種の體長 20-30 cm 迄の間は珊瑚礁間の淺所に甚だ多く棲息するに拘らず漁夫はこれを探らず、老成して 45-60 cm に達して海の深みに移つたものからは始めて良好な製品が出来ること云ふ。蓋し體壁が厚く肉質になる故である。筆者が檢した八重山産の製品シーハヤー (第 1 圖) は本種である。蘭領印度諸地方での名は tripang radjah, t. kandang-kandang, t. kaling-kaling, t. batoe kling, t. timbako-



第 1 圖

シーハヤー *Holothuria*
(*Holothuria*) *atra* JAEGER.
× 3/4. 八重山産 (原圖)-

long, t. dara 等。この最後の名は血海參を云ふ意味で、や・色の薄い品種に與へられたものである。値は 1 ピクル 60—100 グルデンを云ふ。

筆者は本種をクロナマコと呼んでゐるが、八重山でリーサン又はフースクル（フーは黒の訛）を呼ぶは本種であらうかと思ふ。體を小片に刻んで海中に投ずるに魚類が死んで浮くを云ひ、また鍋で煎じた肉汁を海中に流すに魚を弱らせるを云ふことなごを聞いた。⁽²⁾

2. *Holothuria (Holothuria) edulis* LESSON

體長 40 cm に達する。背面は紫黒色で腹面は鮮紅色、管足は黒點として見られる。骨片は櫓狀體を鈎にであるが、前者にあつては基底が小さく櫓の柱は可なり發達し、上端が擴がつて居る。鈎は小さく通常菱形で4個の孔を有するに過ぎない。本種の分布はモザンビク・ザンデバルからカロリン・フィジー群島に及び、北はわが奄美大島迄、南はクキンズランドに達する。箕作博士が本種を採集された大島の薩川・蘇荊^{さつかは}兩地は本種分布の北限になつて居る。

本種を大島ではアカミシキリ、沖縄ではアカワタミと呼ぶ、後者は腹面が赤いを云ふ意味である。蘭領印度では tripang batoe kling, t. goesoh, t. dara なごの名で知られ、1 ピクルにつき僅かに 5 グルデンを値するに過ぎぬを云ふ (KONINGSBERGER)。

3. *Holothuria (Holothuria) scabra* JAEGER

體長 73.5 cm に達するものがある。背面は帶縁暗褐色、正中線に沿うて最も濃く、兩側淡色、腹面白色となる。その上に管足が黒く點在して見られる。時としては背面がクリーム色でこれに褐色の斑紋を有するものもある。骨片は櫓狀體を鈎にで、後者は3對の孔を有するを通例とし、中線に沿うて疣を生じて居る。本種の分布は西ナタール・紅海から東カロリン・フィジー兩群島迄、北はわが奄美大島、南はトルレス海峡に亘つて擴がつてゐる。箕作博士は大島の瀬戸内海峡(?)で本種を採集された。

箕作博士は沖縄産の乾製品を見て居られるがその市場に於ける名稱を記されてない。蘭領印度では tripang gamat betoel, t. taai koetjing, t. boewang koelit, t. kapoer, t. poetih, t. bakan, t. passir, t. kaos, t. paleh 等々の名があり、1 ピクル 15—30 グルデンの値がある (KONINGSBERGER)。

4. *Holothuria (Holothuria) vagabunda* SELENKA

體長約 20 cm. 暗褐色乃至淡褐色、腹面白色。骨片は表層に櫓狀體、深層に鈎が見られ、後者

2) 日本山海名産圖會、卷の四に“熬海鼠の汁又は鯨の油を水面に點滴すれば塵埃を開きて水中透明底を見る事鏡に向ごとく”容易に海鼠を捕ることが出來るとあるは、今の場合と目的は違ふが何等か關係があるのではないかと思はせられる。

は 3 對の孔を有する。キュヴィエ氏器は良く發達してゐる。本種の分布は極めて廣く、西はアフリカ東岸から東は南米ペルー迄、北はわが本州南岸、南は濠洲アデレード迄、印度洋と太平洋との殆ど全部に亘つてゐる。わが伊豆の神津島が分布の北限となつて居り、箕作博士はなほ四國・日向・薩摩の諸地點、甌島、及び奄美大島、沖縄等の産を検して居られる。

食用としては箕作博士は何等言及せられぬが、蘭領印度地方でも製品として價值大ならず云ひ、tripang talengkoe, t. hideung, t. itam, t. boeboeta, t. sandoerei, t. koenting, t. getah 等の名で取引される。この最後の稱呼は本種が容易にキュヴィエ氏器を放出して採取者を悩ます特性を表はした名である云ふ (KONINGSBERGER)。

亞屬 *Bohadschia* JAEGER, PEARSON

5. *Holothuria (Bohadschia) marmorata* (JAEGER)

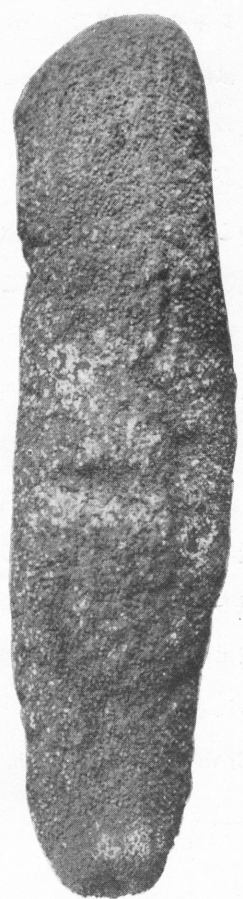
體長 40 cm, 幅 14 cm にも達する大形の種。生時に於ける色彩は全面黄褐色、腹面は淡色、時には殆ど白色に近いが背面は濃く、これに大小不規則形をなした黄色の斑紋があり、それらは濃赤褐色の細い輪廓で圍まれてゐる。その狀恰も地圖の如くで、本種の種名はその模様を形容したものである。體壁厚く肉質、良く發達したキュヴィエ氏器がある。皮膚の表層にある骨片はX狀體から導かれる微細な花紋様骨片で分岐の先端が皆丸く擴がつて居り、屢々それらが互に癒着して穿孔板乃至橢圓形の板狀體となる。深部には本種特有の卵形乃至橢圓形の顆粒がある。

本種の分布はモーリシアスからフィジーに亘り、北は我が沖縄に達し、箕作博士の採集には那覇港口自謝加瀬産の者がある。同博士の記事には本種が食用となる由を云つてないが、KONINGSBERGER によれば本種は蘭領印度諸地方で tripang talek, t. getah, t. kawas, t. doejoeng, t. tjotjak, t. olo-olo 等の名で呼ばれ、1 ピクルにつき 5 グルデンの價を以て取引される云ふ。

6. *Holothuria (Bohadschia) argus* (JAEGER)

(第 2 圖)

大なるは長さ 35 cm に達する。生時は帶黄灰白色の地に極めて特有且つ顯著な斑紋を有するがため一見他種から區別することが出来る。それは背側に多少不規則な縦列をなせる眼狀紋で、疣



第 2 圖

メハヤー、ミハヤー
Holothuria (Bohadschia)
argus (JAEGER). $\times 3/4$.
八重山産。(原圖)。

足の基部が黒斑をなし、之を繞つて黄色の小區域があり外方に向つて漸次暗黒色となり、鋭く區切られた狭い白色の環で圍まれてゐる。斯様な斑紋は必ずしも正圓をなさず、時に不規則形となり或は相隣るものが互に連合するところがある。腹面も帶黄灰白色であるが眼狀斑紋を有しない。皮膚の骨片は、繊細な唐草様花紋狀體で、前種に見る如き深部の卵形顆粒がない。體壁肉質、キューヴィエ氏器がある。

本種はセイシュルからタヒチに、北は大島・沖縄に及び南はクキンスランドに亘つて分布する。箕作博士は奄美大島蘇荇、沖縄島自謝加瀬・喜屋武崎・知念崎・糸満等で本種を採集されたが、筆者等も八重山諸島の珊瑚礁で屢々これを見た。箕作博士によれば奄美大島ではアヤミシキリ、沖縄でメハヤー（目羽屋）と云ふ由、八重山では訛つてミハヤーと云ふ。蓋しアヤミは綾目で美しい紋様を意味するのである。なほ八重山でミーピカラー即ち目光ると云ふ意味の名ある海鼠があるを聞いたがこれも本種のこゝかと思ふ。蘭領印度では tripang oelarmata 及び t. patola の名があるが oelarmata は蛇の眼と云ふ意味である。本種の學名 *argus* を始めこれら諸地方の名稱はかの眼様紋に因んだ名であるを勿論で、この他なほ豹魚・虎魚・斑魚等の意味で呼ばれるところがあり、筆者も和名としてジャノメナマコと呼んで居る。製品（第2圖）は沖縄で100斤の價17圓（箕作）、八重山で15圓（照屋）、南洋では1ピクルの價25グルデン（KONINGSBERGER）すると云ふ。

7. *Holothuria (Bohadschia) vitiensis* (SEMPER)

體長30cm以下。背面は淡黄褐色の地に散在する各疣足の基部には暗褐色の小環がある。體の兩側にはやや大なる十數個の斑點が不規則に並び、腹面は白色を呈する。骨片は前種のに似るが深部に卵形の顆粒が無い。分布はニコバルからサモアへ、北はわが奄美大島に達する。箕作博士は大島蘇荇産の標本を記載され、大島の住民がこれをシロシキリと呼ぶ由を述べて居られるが食用としては一言も云はれてない。KONINGSBERGERによれば蘭領印度諸地方では tripang krido, t. getah, t. gama, t. lai-lai などと名づけられ、肉厚く骨片少きため良好の製品となる由である。

8. *Holothuria (Bohadschia) bivittata* (MITSUKURI)

（第3圖）

體長約30cm 背腹著しくその色彩を異にし、背面の地色は黄乃至褐色、これに2條の幅廣き暗褐色の横縞が走る。種名 *bivittata* はこれに因んだものである。腹面は一様に淡褐色または殆ど白色に近い。皮膚の骨片は前掲の諸種のそれに似て、X狀體から導かれた花紋様の小體、

又はその肥大による橢圓形の板狀體。キュヴィエ氏器はよく發達してゐる。

箕作博士は沖縄島知念崎産の標本によつて始めて本種を記載されたのであるが、なほ宮古島産の製品を検して居られ、筆者は八重山で生體を見、また製品（第 3 圖）を得た。沖縄でも八重山でも本種の製品をスナハヤーミ呼び、100 斤の價八重山では 15 圓である。

亞屬 *Actinopyga* BRONN, PEARSON emend.

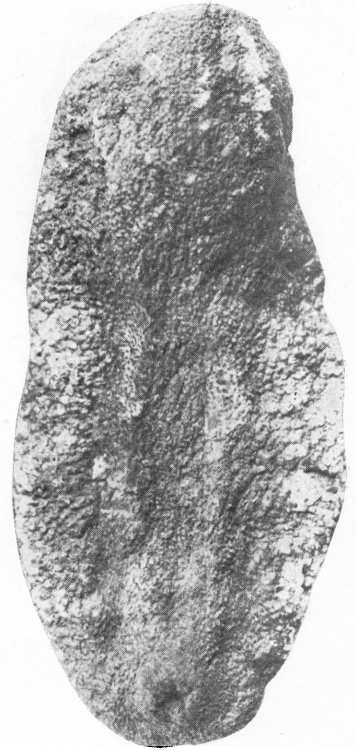
9. *Holothuria (Actinopyga) lecanora* (JAEGER)

（第 4 圖）

體長 30 cm. 背面は生時紫黑色（酒精浸後チョコレート色）の地にやゝ横走する不規則形黄色の斑紋があり、腹面は白色。骨片は短い桿狀體の兩端が數次分岐して卷鬚狀を呈するもの、乃至花紋様の小體。分布はモーリシアスからトンガタブ迄、北は沖縄、南は大堡礁地方迄。



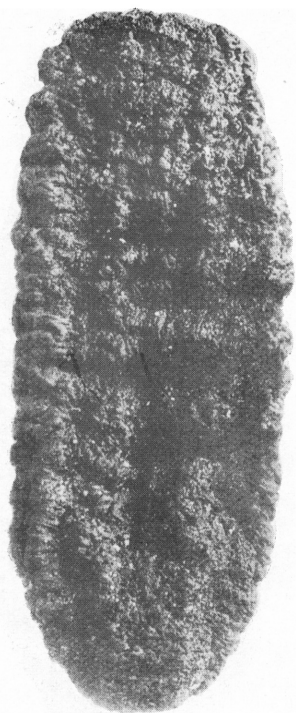
第 4 圖
シビー *Holothuria (Actinopyga) lecanora* (JAEGER).
× 3/4 八重山産（原圖）。



第 3 圖
スナハヤー *Holothuria (Bohadschia) bivittata* (MITSUKURI).
× 3/4 八重山産（原圖）。

PANNING は本種は次に述べんとする種 *miliaris* の一變種とすべきであらうか云つて居る（6, p. 127）。

箕作博士は沖縄島糸満・喜屋武崎等で本種を採集されたが、沖縄でも八重山でも本種の製品をシビーミ稱する（第 4 圖）。箕作博士はこれに志比字ミ云ふ字をあて、子安貝に似るミ云ふ意味なりミ記して居られる。八重山では子安貝のこゝをシビーミ云はず訛つてスビ（sbü）ミ云ふ。この海鼠が體壁を縦に裂かれ強く短縮して圓くなつた製品の形がやゝ子安貝に似てゐる所からかく呼ぶのであらう。CLARK (1, p. 188) によればトルレス海峡地方の漁夫はこれを石魚ミ云ふ意味の名で呼んでゐるミ云ふ。本種は上品に屬し、八重山での價格は 100 斤につき 50 圓である。



第 5 圖
チリメン *Holothuria (Actinopyga) miliaris* (QUOY et GAIMARD). $\times 3/4$.
沖縄本島産? (箕作原圖).

10. *Holothuria (Actinopyga) miliaris* (QUOY et GAIMARD)

(第 5 圖)

體長 27 cm に達する。生時は全體一樣に 暗紫色乃至暗褐色を呈し、腹面は少しく淡色である。體表の骨片は細い桿狀體の左右に多くの短い小枝を生ずるもの、及び小形や、不完全な花紋樣體。分布はモザンビク・紅海からカロリン・トンガ諸群島に亘り、北はわが奄美大島に及ぶ。箕作博士は大島の蘇莉で本種を獲られた。

本種で製した 熬海鼠 (第 5 圖) は チリメンミと呼ばれる。蓋し表面が強く細かい皺襞を生じてゐるここに因んだ名である。蘭領印度諸地方の名は tripang balibie, t. batoe, t. belang oeloe, t. betoel, t. bilaloe, t. djepoeng 等々多数あるが他は省略する。トルレス海峡地方では烏參 (black fish) の名がある。價格はさきに引用した如く 100 斤の價清貨 140 ^{テール}兩、箕作博士によれば沖縄で 120 圓、KONINGSBERGER によれば 1 ピクル 50-70 グルデンである云ふ。

11. *Holothuria (Actinopyga) mauritiana* (QUOY et GAIMARD)

(第 6 圖)

體長 35 cm に達する。通常はオリーブ褐色乃至琥珀色の地に疣足の基部を白斑が圍んでゐる。これらの褐色部と白色部との擴がりの比率に著しい變異がある。腹面は淡ピンク色。背面の骨片は多くの短い側枝を有する桿狀體と、短い花紋樣體。腹面では鋸齒狀の縁を有する太い桿狀體と、多数重なり合つた橢圓形板狀の小體とである。分布は極めて廣く、西はモザンビク及び紅海、東はハワイ・マアケサス及びパウモツの諸群島、北は沖縄、南はフィジー群島に及ぶ。箕作博士は那覇伊那武瀨産の標本の外に尖閣群島黃尾島の産 (宮島幹之助博士採集) をも檢して居られる。

本種の製品 (第 6 圖) は沖縄でも八重山でもザウリ或はザウリゲタ (鞋海參) と呼ぶが、メナドでは tripang goela,



第 6 圖
ザウリ, ザウリゲタ
Holothuria (Actinopyga) mauritiana (QUOY et GAIMARD). $\times 3/4$. 八重山産.
(原圖).

トルレス海峡地方では紅靴 (red fish) の名を與へてゐる云ふ。八重山でアスクルミ云ふはこの種を指すのかと思ふ。価格は 100 斤につき沖縄で 60-70 圓 (箕作), 八重山で 35 圓。上之中の品だ云ふ。

12. *Holothuria (Actinopyga) echinites* (JAEGER)

背面暗褐色, 腹面や、淡き褐色。皮膚の骨片は甚だしく分岐した桿状體さきはると小形の花紋様體との 2 種で, 兩者の間に移行型が見られる。分布はザンヂバルからフィジー, 沖縄からクキンズランドに至る。箕作博士は那覇港外先原で本種を採集された。

製品は *H. miliaris* と共にチリメンと呼ばれるが, 蘭領印度でも同様の混同があり, tripang kasik, t. koro などと呼ばれ, トルレス海峡地方でも *H. mauritiana* と共に紅靴と, また *miliaris* と混同して烏参と呼ばれる。

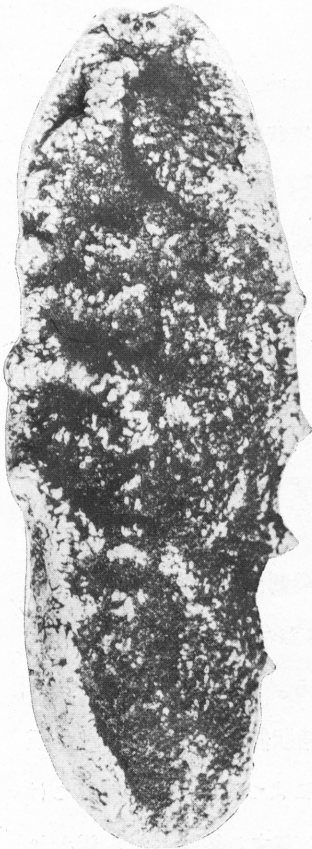
亞屬 *Microthele* BRANDT

13. *Holothuria (Microthele) nobilis* (SELENKA)

(第 7-9 圖)

全體黑色, 時々して白色又は帶黄白色の斑點があり, これらが體の側面に數條の横線を作るこがある。體の兩側に乳房狀の突起が並ぶため管で “*Holothuria mammifera*” と呼ばれたこがある。この突起は生時にのみあつて保存標本には消失して居る。皮膚の骨片に 2 種あり, 表層をなすは全縁, や、四角形の基板と 4 本の柱をもつ頑丈な櫛狀體, 深層には厚く相重なれる特異な紡錘狀の穿孔體がある。これらは 7 本の縦桿が横桿によつて不規則に結びつけられた結果長い籠の形を作つたものであるが, 恐らく 2 列の穿孔を有する鉤狀板から導かれるものであらう。後者も數多混在して見られる。キュヴィエ氏器は良く發達してゐる。分布は西ナタール及び紅海から東ハワイ及びフィジー迄廣く延び, 北はわが沖縄に及ぶ。箕作博士は *Mülleria maculata* と云ふ名で沖縄産の標本を記載して居られる。

本種の熬製品にはシロウサー (白鼠, 第 7 圖), クロウサー (黒鼠, 第 8 圖) の 2 品種があるが箕作博士は 多分生時の色彩の變異に因るのであらうと云はれる。トルレス海峡産のものに石参 (teat fish), 白靴 (white teat fish), 烏双蟲 (black snake) 等の外に乳房をもつ魚と云ふ意味の名がある。さてさきに引用したもの (8) にクラウソウ・白ウサフ など書いてあつたのは勿論本種のこであるが, 別の所に (9) 烏^{ウスウ}縷即ち肉刺なく縷あり色黒きものとのあるもこれに當ると思はれる。ウサー或はウソウは烏縷を讀んだもの, 烏双・鼠などの字は音に合せて作つたものではなからうか。蘭領印度の方言は tripang soesoeh, t. soesoeh batoe, t. soesoehan, t. boewang koelit, t. batoe, t. koro, eb met 等地方によつて異なるが, KONINGSBERGER



第 7 圖
シロウサー *Holothuria*
(*Microthele*) *nobilis* (SELENKA).
× 3/4. 八重山産. (原圖).



第 8 圖
クロウサー *Holothuria*
(*Microthele*) *nobilis* (SELENKA).
× 3/4. 八重山産. (原圖).



第 9 圖
サバ *Holothuria* (*Microthele*)
nobilis (SELENKA). × 3/4.
八重山産. (原圖).

によれば“soesoe”は帯白色の品に, “batoe”は黒色の品についた名である云ふ。價は 1 ピクルにつき 110 グルデン, クキンスランドでは 1 噸につき 240 磅, 八重山ではクロウサー 100 斤 45 圓, シロウサー 35 圓。箕作博士は白黒兩者を區別せずに 150-160 圓に記して居られる。蓋し上品に入るべきものである。

なほ八重山でサバと稱する熬海鼠(第 9 圖)があるが, 外觀は白ウサーに似て居り, 骨片の形態からすれば本種と同定すべきものである。たゞ 100 斤 15 圓に云ふ安價な品であるのは恐らく製法が異なる故であらうか。サバは八重山語で草履を意味する。

屬 *Stichopus* BRADNT14. *Stichopus variegatus* SEMPER

(第 10 圖)

頗る大形の種で體長 40-79 cm にも達する。色彩は甚だ不定、オリーブ色を帯びた黄色に暗緑色の斑紋あるもの、黄褐色に濃緑色の斑條あるもの、黄灰色の地に暗褐色の斑點及び網様紋あるもの、甚だしく黒色を帯びたもの等を見る。一般皮膚内の骨片は小さい基底を有する櫓狀體、C 字體、及び花紋樣體の 3 種である。

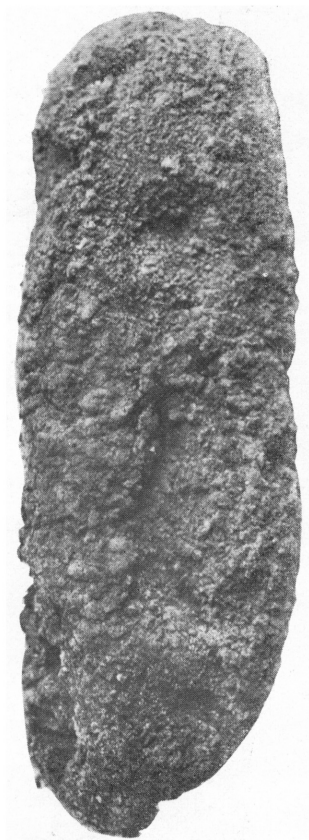
本種の分布も極めて廣く、西はザンデバル・紅海から東はカロリン・サモア諸群島に至る。北限はわが伊豆七島の神津島で、箕作博士は太島^{かげろま}加計呂麻島産を記録して居られる。なほ同博士の *Stichopus hirotai* 及び *S. oshimae* の兩種は本種の異名とされた (CLARK, 1922, 2)

沖縄・八重山地方では本種をダルガー と呼ぶが、八重山では從來有毒だと云つて採らなかつたのに、昭和 7 年以來これを製品とするやうになり、而かも軟かくて上々の品が出来る (第 10 圖)。生時の色が黄色であること云ふところから、これをキンと名づけ、100 斤 50 圓の價で賣却される (照屋)。蘭領印度では tripang hatjang goreng, t. taai koetjing 等の名があり、1 ピクル 5-15 グルデン。特に海の深部から採つたものは價よく 25-30 グルデンで買はれること云ふ (KONINGSBERGER)。

15. *Stichopus chloronotus* BRANDT

體長 30 cm に達し、やや角柱狀を呈する。全身濃黒色に綠色を帯び一見容易に他種から區別せられる。皮膚の骨片は櫓狀體と C 字體とで、花紋樣體を缺く。本種の分布も極めて廣くモザンビークからハワイまでの暖海一般に見られ、わが奄美大島の薩川はその分布北限である。

本種は黒色なるが故に *Holothuria atra* と共にクロミシキリと呼ばれるが、極めて普通に饅産し、且つ大形であるに拘らず採取製造されるのを聞かない。CLARK (1, pp. 157, 187) もトルレス海峡地方に於ける調査で同様のことを云つてゐる。しかし蘭領印度では本種の製品に



第 10 圖
キン、ダルガー *Stichopus
variegatus* (SEMPER).
× 3/4. 八重山産・(原圖)。

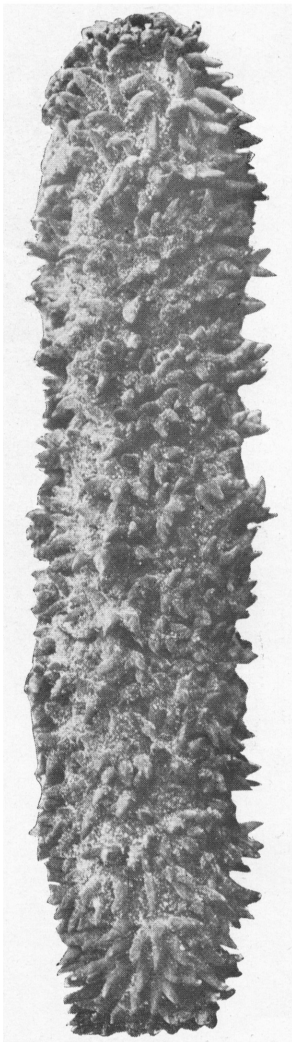
tripang djepong, t. pandan, t. poetih, t. ringgitan, t. senie なぎの名があり, 1 ビクル 15—30 グルデンで賣買されること云ふことである (KONINGSBERGER)。

屬 *Thelenota* BRANDT

16. *Thelenota ananas* (JAEGER)

(第 11 圖)

海鼠類中最大の種で體長 75 cm に達するを見るが, S. KENT (1893) が 3—4 呎に達すること云つたのも強ち信じ難くもないこと云はれる。全身美しい橙色, 恰も熟した赤茄子^{トマト}の色で, 背面



には微細な黄色の點が散在し, 腹面は赤色が特に著しい。極めて特異な大形の疣狀突起が數箇所ずつその基部で合着して星狀を呈し, これらの形態と色彩とは決して他種との混同を許さない。皮膚の骨片は密に重なつた極微細顆粒と, 細く鋭く尖つた X 狀體とである。本種はジャヴァ地方からマーシャル群島へ, 北はわが沖縄地方に及んで分布する。箕作博士は沖縄本島の自謝加瀬及び喜屋武崎の産を記録された。ジャヴァ以西印度洋に知られないのは奇すべきである。

ガヂマル・ガヅマルなごと呼ばれる熬海鼠 (第 11 圖) は本種の製品で, 外に梅花參・開花梅花參なごの名があり, 筆者もこれをバイクナマコと呼んで居る。かの特異な複合疣足の形に因んだ名であること勿論であるが, 種名 *ananas* も亦よくその外觀を形容してゐる。蘭領印度地方でも tripang nanas, eb nas なごと同じ意味の名で呼んでゐる。八重山でガザブネーと云ふのはガヂマルの訛でもあらうか。製品は沖縄で 100 斤 40—50 圓 (箕作), 八重山で 25 圓 (照尾), 蘭領印度で 1 ビクル 100—120 グルデン (KONINGSBERGER), トルレス海峡地方で最良品 1 磅 75 仙 (CLARK) の値があること云ふ。漁夫は競つてこの高價な海鼠を採取するため到的所の淺海から採り盡された觀があり, またその採取のためには屢々身命の危険をさへも賭ける程であること云ふ。筆者は 3 回の八重山地方採集旅行に於いて遺憾ながら遂に本種

第 11 圖
ガヂマル *Thelenota*
ananas (JAEGER).
× 3/5. 八重山産 (原圖).

の生きたものを見る機会をもたなかつた。

結 語

以上つとめて専門的記載を避け、生時の外観と、製品によつても識別し得べき骨片の特徴とを略述したのであるが、ここに列挙した 16 種のうち *Holothuria vagabunda*, *H. marmorata*, *H. vitiensis*, *Stichopus chloronotus* の 4 種は沖縄地方に産しながら同地方では食用として採取製造されないらしく、南洋地方では他種と同様に製品として取引されてゐる。かの *Stichopus variegatus* の如くつい近年迄棄て、顧みられなかつた種が突如として上々品の原料となるやうになつた例もあることだから、向後ともなほ經濟價值を有する種が発見されることのないとは斷言されまい。この他南洋産食用種にして沖縄地方にも棲息してゐるさうに思はれるものも尠くない。他日の研究によつて明かにせられることを希望する。なほ方言について云へば、八重山地方でピーアカ（ピーは干瀬のこま）、スサバヤー（白線の意）の 2 種があるが何種の高鼠を指すものか今のところ不明である。

本報告は、沖縄縣産の高鼠を各地點から多く集めて廣く詳しく檢索したわけではなく、また筆者等が採集した標本（製品に非ざる）の検査も完了して居ないのであるから、不完全な點の多いのは遺憾で、他日機會を得て不足のところを補ひ度いと思ふ。

筆者等の八重山地方旅行調査の費用の一部は帝國學士院と日本學術振興會とから支給された研究補助費に仰いだものである。また本調査に用ひた標本と資料との蒐集のためには石垣島在住の岩崎卓爾・喜舎場永珣・照屋清榮の 3 氏、及び行を偕にされた江崎梯三・池田隼人・馬場菊太郎・三宅貞祥の諸氏の御厚意に負ふ所が多い。特に記して深き感謝を捧げる次第である。

引用文獻

1. CLARK, H. L. 1921. The Echinoderm fauna of Torres Strait: its composition and its origin. Dept. Mar. Biol., Carnegie Inst., Washington, vol. 10, pp. 1-223, pls. 1-37.
 2. ——— 1922. The holothurians of the genus Stichopus. Bull. Mus. Comp. Zool., Harvard Coll., vol. 65, no. 3, pp. 39-74, pls. 1-2.
 3. KONINGSBERGER, J. C. 1904. Tripang en Tripangvischerij in Nederlandisch-Indië. Med. 'Sl. Plant., 71, pp. 1-72, pls. 1-9.
 4. MITSUKURI, K. 1912. Studies on actinopodous holothurioidea. Jour. Coll. Sci., Imp. Univ. Tokyo, vol. 29, art. 2, pp. 1-284, pls. 1-8.
 5. 大島 廣 1913. 食用 of 海鼠。魚學雜誌。第 1 卷, 第 6 號, pp. 8-10.
 6. PANNING, A. 1929, 1934. Die Gattung Holothuria (1. Teil). Mitt. Zool. Staatsinst. u. Zool. Mus., Hamburg, Bd. 44, pp. 91-138; (2. Teil). Do., Bd. 45, pp. 24-50; (3. Teil). Do., pp. 65-84.
 7. シモントス (濱野定四郎・伊東茂右工門譯) 1881. 海産論。開拓使。
 8. 水産局 1886. 清國輸出日本水産圖説。pp. 1-8, pls. 1-7.
 9. ——— 1886. 清國水産辨解。中卷。pp. 52-67, 5 pls.
 10. 沖縄縣 1930. 沖縄縣水産統計。(謄寫版刷)。
 11. 八重山支廳 1932. 八重山郡勢要覽。
-

KOMERCEBLAJ HOLOTURIOJ DE RIUKIU

(resumo)

Hiroshi OHSHIMA

Tra la plej parto de Japanujo, de Karafuto, Ĉiŝima kaj Ĉosen ĝis la suda pinto de Kjuŝiu, la sola manĝebla speco de holoturio estas *Stichopus japonicus*, se oni flankenlasas la du ceterajn, nome, *S. nigripunctatus* kaj *Cucumaria japonica*, kies distribuoj estas multe limigitaj.

En la insularko de Riukiu, inkluzive Amami-Insularon, okazas multaj tropikaj holoturioj, dum la suprenomitaj tri ne estas troveblaj. Tie holoturioj estas kuiritaj kaj poste sekigitaj kiel „iriko” aŭ „tripang”, por sekve esti elsenditaj al Ĥinujo, kiel same estas faritaj en Holanda Orientohindujo kaj nordaj partoj de Aŭstralio.

Rezulte de mia ekzameno de sekigitaj komercaĵoj kaj utilo de l'studo de MITSUKURI (1912), oni nun povas distingi 16 manĝeblajn aŭ komerceblajn holoturiojn de Riukiu, apartenantajn al tri genroj, nome, *Holothuria* (kun subgenroj *Holothuria*, *Bohadschia*, *Actinopyga* kaj *Microthale*), *Stichopus* kaj *Thelenota*. Iliaj lokaj nomoj kaj prizoj en la komerco estas menciitaj, aldone al simplaj zoologiaj priskriboj.

Tamen, en la 16 specoj, la kvar, nome, *Holothuria vagabunda*, *H. marmorata*, *H. vitiensis* kaj *Stichopus chloronotus*, estas ne rigardataj de riukiuanoj kiel komerce valoraj dum ĉi tiuj ankaŭ estas ja ŝatataj en sudinsulaj eksterlandoj. *Stichopus variegatus* estadis longe rigardita kiel nemanĝebla, eĉ venena, antaŭ la jaro 1932, kiam oni subite ektrovis ĝian valoron, kaj ĝi nun faras bonegan prezon en komercejo. La aŭtoro antaŭatendas, ke per pluaj serĉoj pli da specoj estos aldonataj al la listo de komerceblaj holoturioj de Rikiu.